

令和2年度 家政学部 前期授業アンケート結果の講評

学科/専攻： ライフスタイル学科/家政学専攻

講 評 者： 学科長/専攻主任名 丹羽 誠次郎

<p>質問 1～8 学生の授業や教員に対する評価について</p>	<p>授業や教員に対する評価についての設問のうち Q1～Q7 に対する学生の回答は、「強くそう思う」が 47%～39%、「ややそう思う」を含めると 84%～72%と概ね肯定的な評価をしていることがわかる。ただし、前年度後期と比較すると（設問の表現を若干変更している／年度が異なるため集団も同一ではないという条件付き）、肯定的な評価は大きく下回っている。特に教員の説明の明瞭度を問う Q2 では「強くそう思う」が 17%も下回る結果となっている。逆に Q8 「教員が作成した PCR シートは学習内容の理解に役立った」は肯定的な評価は 30%も増えている（4 択から 5 択に変更という条件付き）。これらは今学期の授業の多くがリモートでの開講となったことに影響されていると言えるだろう。</p>
<p>質問 9～17 学生自身の学修に対する評価について</p>	<p>自身の学修に対する評価について設問のうち Q9～Q13 に対する学生の回答は、「強くそう思う」「ややそう思う」を合わせた結果が 64～48%で、これは前年度後期から若干高い値となっている。特に予・復習の時間を 90 分以上と回答した学生がそれぞれ 84%、77%（前年度後期は 19%、19%）と飛躍的に長くなっている。これは、リモートでの開講科目で多くの課題が課されたことに因るものと推測される。また、到達目標の達成度を問う Q17 は肯定的な評価が 66%（前年度後期は 56%）、授業への満足度を問う Q18 では肯定的な評価が 73%（前年度後期は 70%）となっており、Q1～Q8 の授業や教員に対する評価が低くなっているにも関わらず、このような結果が出たのは、学生自身がしっかりと学修に取り組んだという意識を反映しているのではと推測される。</p>
<p>質問 18 学生自身の学修行動に対する評価について</p>	<p>Q18 「本授業の学習行動において、発揮できなかった能力はどれですか(複数回答可)」に対する学生の回答は 15%～31%の範囲で 3 つの力、12 の能力要素それぞれに満遍なく分布している。これは前年度後期の 6%～10%と比較すると大きく値が上回っており、特に 31%もの学生がストレスコントロール力を挙げている。これも、「コロナ禍」での大学生活を強いられた今学期の特殊な状況を反映していると言えるのではないだろうか。</p>

令和2年度 家政学部 前期授業アンケート結果の講評

学科/専攻： 管理栄養学科/管理栄養士専攻

講 評 者： 学科長/専攻主任 竹村 ひとみ

<p>質問 1～8 学生の授業や教員に対する評価について</p>	<p>学生の授業や教員に対する評価 Q1～Q8 について、強くそう思う、ややそう思うの回答が 69～81%を占めた。最も高値であった項目は Q1「授業時間分の学修内容の実施」、最も低値であった項目は「PCR シートが学修内容の理解に役立った」、次いで「学生が社会人基礎力を活用できる授業展開」であった。前年度後期と比較すると、若干ではあるが回答のレベルが低下していることから、コロナ禍での非対面授業による質の向上が求められる。また、PCR シートが学修内容の理解に役立つよう改善する余地がある。</p>
<p>質問 9～17 学生自身の学修に対する評価について</p>	<p>Q9 の「PCR シートの社会人基礎力の能力を発揮して予習・復習に取り組んだ」は、強くそう思う、ややそう思うが 67.7%を占めた。Q10～Q13 の「シラバス内容を確認しての予復習の実施」、「予復習により学修内容への理解が深まった」について、各々予習より復習の値が若干高値を示した。毎週の自己学修時間の平均は、予習 32 分、復習 43 分であった。一方、自己学修を 90 分以上実施している割合は、予習 81%、復習 74%と、学生間に差がみられるが、前年度後期に比し自己学修に多くの時間を費やす割合は増加した。Q16「到達目標の達成」は強くそう思う、ややそう思うが 61%、どちらともいえないが 36%、あまりそう思わない、全くそう思わないが 3.3%と、前年度後期に比し良好であった。Q17 の「総合的満足度」は 72%、24%、4.2%と、前年度後期と同水準であった。</p>
<p>質問 18 学生自身の学修行動に対する評価について</p>	<p>発揮できなかった能力要素（複数回答）の問いに対し、発揮できなかったと回答した能力要素の割合は 10～27%の範囲であった。比較的回答割合の低かった要素は「実行力」「傾聴力」「規律性」であり、前年度後期と同様であった。一方で、「働きかけ力」「発信力」はおよそ 27%の学生が発揮できなかったと回答しており、能力要素、割合共に前年度後期と同様の傾向がみられた。学修行動において、今期の非対面授業の影響は少なかった。今後、授業形態別または科目毎の傾向についても分析していく必要がある。</p>

令和2年度 家政学部 前期授業アンケート結果の講評

学科 / 専攻：こどもの生活学科/こどもの生活専攻

講 評 者：こどもの生活学科長/専攻主任 加藤万也

<p>質問 1～8 学生の授業や教員に対する評価について</p>	<p>授業や教員に対する評価としては「強くそう思う」と「ややそう思う」の合算はおおむね70%程度であり、授業や教員に対しての満足度は得られていると考えることができる。ただし、「どちらともいえない」の割合が20%強程度あるということから、まだまだ改善の余地はあると考えられるので、学科教員が一枚岩になって、学生からの信頼を得られるような授業改善などの努力をしていきたい。</p>
<p>質問 9～17 学生自身の学修に対する評価について</p>	<p>これらの項目は「ややそう思う」と「どちらともいえない」に集中しており、合算するとおおむね60～70%という数値になっている。学生自身が学びについて、もっと積極的に予復習に取り組む指導が必要だと言える。ただし、前期はリモート授業の比率が高かったので、リモート授業内での予復習が通常と若干異なったことも影響している部分であろう。予復習とシラバス理解のため、毎時の授業においてシラバスとの関連を明確にし、シラバスに記載された予復習について十分な理解の必要性を感じている。ただ科目によって予復習の方法やフィードバックの方法に様々な違いがあるので、それを踏まえた上で、予復習を含めた学生自身の学びに対して「自信と誇り」を持てるような働きかけが、教員側にさらに求められる。</p>
<p>質問 18 学生自身の学修行動に対する評価について</p>	<p>家政学部全体の数値と比較すると、「主体性」「実行力」「計画力」「発信力」「傾聴力」において高値を示している。一方で、「課題発見力」「創造力」「状況把握力」においては低値である。このことから推測できるのは、主体的に行動し、計画に準ずることには長けているが、自身の分析力を発揮した課題発見や状況把握についての能力に弱点が見られる。先を見通した分析的能力は、保育・教育という人と関わる業務において必須の力である。そのため今後はこうした点に焦点を絞り、学科全教員で先を見通す力を育成するような体制を整えていきたいと考えている。</p>